

英語の中間構文について

友 繁 義 典

0. はじめに

小論では、英語の中間構文に関して若干の考察を行う。中間構文は受動文に似て、「(主語名詞) が～される」のような意味を表すことがある。例えば、最近では、IT関係の表現に、The menu will repeat. (=The menu will be repeated.) や Setup is initiating. (=Setup is being initiated.) といったような例が多々見られることが報告されている (Bruthiaux 2001:25)。中間構文では動作主が表面に現れないのだが、受動文でも、例えば、The book has already been sold. のように、動作主が表面に現れないものも多く見られる。しかしながら、受動文の場合は、The book has already been sold by John. のように動作主が表面に出ていても文法的であるが、*The book sells well by John. は容認されない文である。また、例えば、目的を表す副詞句伴う That book was written in order to amuse children. のような受動文は文法的であるが、*That book reads well in order to amuse children のような中間構文は非文法的である。以上のように、受動文と中間構文には共通点も認められるのだが、両者が存在する理由は両者にそれぞれ存在理由があるからに他ならない。中間構文の特徴は、動作主の存在を背景化し、被動者である主語名詞がまるで動詞句の表す内容を実行する「主体」であるかのように見せかける機能を持つところにあると考えられる。上で見た、IT関係の表現からまさにそういった中間構文の特徴がうかがえよう。

典型的な中間構文と考えられるものには、This sports car drives easily. や This book reads well. などがある。典型的な中間構文の特徴は、1) 時制は単純現在である、2) 様態の副詞を伴う、3) 「可能性」や「見込み」のような法的な意味を表す、4) 動詞は常に能動形である、5) 被動者 (patient) が文の主語位置に現れる、6) 総称的な陳述がなされている、7) 動作主 (agent) は統語上姿を見せない、というようにまとめることができるであろう。少なくとも、以上の7つの特徴を持っている中間構文が典型的であると考えられるが、上のすべての特徴を持っていないでも中間構文として成立している例も存在し、そのような例も考察しながら、

ら、副詞 (語句) にはどのようなものが使われるのか、動詞はどのような種類のものが許されるのかななどを以下で検討することにする。

1. 総称性と出来事描写

Keyser and Roeper (1984, 以後K&R) や Bassac and Bouillon (2002, 以後B&B)などは、中間構文は総称的な陳述を表すので、動詞が進行形の中間構文は存在しないと述べて次のような例を挙げている。

- (1) a. *Chickens are killing. (K&R 1984 : 385)
- b. *Bureaucrats are bribing. (Ibid.)
- c. *The walls are painting. (Ibid.)

しかし、Iwata (1999 : 531) は、主語を定の名詞に直し、様態の副詞を添えることで、上の容認されない例を文法的な中間構文にすることができることを指摘している。

- (2) a. These chickens are killing easily.
- b. These bureaucrats are bribing easily.
- c. The walls are painting easily.

さらに、以下のような例も見られる。

- (3) a. These books are not going to sell easily.
(Huddleston 1971 : 70)
- b. The film is showing at the Scala.
(Rosta 1995 : 137)
- c. The truck is handling smoothly.
(Fellbaum 1986 : 4)
- d. This book is selling like hot cakes.
(O'Grady 1980 : 66)

動詞が進行形の中間構文では総称的な陳述がなされているのではなく、特定の出来事 (event) が述べられている。時制が単純現在形の場合においてのみ主語名詞に内在する特徴づけがなされるのであり、現在進行形の動詞が用いられている場合は、文字通り、現在進行中の出来事が述べられているのである。

過去時制の中間構文も存在するが、K&R (1984:384) が指摘する通り、特定の時間を示す副詞語句は以下のように許されない。

- (4) a. ?Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.

- b. ?At yesterday's house party, the kitchen wall painted easily.

しかし、特定の時間を指し示す副詞語句がない過去時制の中間構文は以下のようにめずらしくはない。

- (5) a. The book sold out well and was reprinted many times. (OALD)
b. Those sports cars didn't sell. (Dixon 1991 : 326)
c. The clothes washed easily. (Huddleston 1971 : 70)
d. The dried mud scraped off effortlessly. (Langacker 1991 : 334)

さらに、過去時制の動詞が進行形の中間構文もある。

- (6) a. While my baggage was loading, ... (Rosta 1995 : 137)
b. In the kitchen dinner was preparing. (Ibid.)

以上のことから、中間構文の主語名詞の総称性が表わされるのは、動詞が単純現在時制形の場合であることが分かる。また、動詞が単純過去時制の場合には、過去時における主語名詞の総称性を表す読みを許す場合と、単なる過去時におけるある特定の出来事を表す場合がある。そして、動詞が現在時制の進行形の場合には、現在進行中の出来事が述べられていることになる。ただし、典型的な中間構文に関しては、上で述べたように、動詞句の表す内容は被動者である主語名詞がそれを実行する主体であるかのように見せかける役割を果たすところにその特徴があることを再度確認しておきたい。

2. 中間構文に現れる副詞 (語句)

典型的な中間構文には *easily* や *well* のような副詞、あるいは *rapidly* や *in a jiffy* のような副詞表現が現れる。例えば、次の各例は、なにがしかの副詞が共起しないと非文法的とされる。

- (7) a. *This magazine reads. (Fellbaum 1985 : 22)
b. *The clothes wash. (Ibid.)

これらが文法的な中間構文として認められない理由は、主語名詞の特徴づけが十分に行われていないからである。(7a) に関しては、雑誌は読むための物であることは自明の事であり、そのような雑誌の特徴づけとして、単にそれを「読む事ができる」と述べても全く伝達価値のある表現になっていない。同様に、(7b) に関しても、「衣服」は「洗うことが出来る」ものであるという認識が一般にされていると考えられ、中間構文の形をとって、

「洗える」という分かりきったことを「衣服」の特徴であると述べても情報として価値がない。従って、どのように雑誌が読めるのか、どのように衣服が洗えるのかということを、例えば、*easily* のような副詞を添えて示さない限り、情報として不十分であるという理由で (7a) と (7b) は排除されることになるのである。しかし、中間構文に常に副詞あるいは副詞語句が必要であるというわけではない。次の各例では、副詞はないが、文法的な中間構文として認められている。

- (8) a. This magazine sells. (Fellbaum 1985 : 23)
b. This umbrella folds up. (Ibid.)

(8a) については、「読み物」としてではなく「商品」としての雑誌という観点から、他の雑誌との対比がなされて、「売れる」という特徴づけがされているので、この場合は副詞がなくても中間構文として成立するのである。また (8b) に関しては、傘には折畳めるものとそうでないものがあり、「(他の傘とは違って) この傘は折りたたみができる」、つまり、便利であるという特徴づけがされているので、中間構文として成立しているのである。以上の観察から、主語名詞がどのようなものとして一般的に認識されるのかということを考慮に入れることによって副詞 (語句) が必要であるかそうでないかが決定されることが分かる。

典型的な中間構文の成立には副詞 (語句) が欠かせないのであるが、その他の要素が中間構文を成立させることもある。例えば、否定辞、法助動詞、*focus intonation* あるいは強調の助動詞 *do* の使用などで副詞 (語句) なしで中間構文が成立する。¹

- (9) a. The book didn't sell. (Bruthiaux 2001 : 26)
b. The book may not sell. (Ibid.)
c. The floor just won't clean.

(van Oosten 1977 : 466)

- d. The car WILL steer, after all. (Rosta 1995 : 132)

- e. These bureaucrats BRIBE. (Ibid.)
f. Boy *did* that mountain climb! (Ibid.)

ここで中間構文によく現れる副詞 (語句) を確認しておきたい。次のようなものが代表的である (Dixon 1991 : 320)。

- (10) VALUE : *well, badly, properly, oddly, etc.*
DIFFICULTY : *easily, with difficulty, etc.*
SPEED : *slowly, fast, quickly, rapidly, etc.*

いずれにせよ、中間構文で許される副詞類は主語名詞を特徴づけるものでなければならないことになる。

3. 中間構文と動作主

中間構文においては、以下のように、通例、動作主が統語的に表面に現れることはない。

- (11) a. *This book reads well by Mary.
 b. *This sports car drives smoothly by George.
 しかしながら、Stroik (1999 : 121) は for + 動作主の形は中間構文で認められると主張し、次のような例を挙げている。
 (12) a. Bureaucrats bribe easily for Bill.
 b. That book read quickly for Mary.

Stroik は for のあとの Bill 及び Mary は Agent であると主張している。それならば (11a) と (11b) に見られるように、典型的に動作主を導く by を伴うような例も中間構文において許されそうなものであるが、実際 (11a)、(11b) は容認されない。Zribi-Hertz (1993 : 587) は (12a) 及び (12b) に見られる for Bill、for Mary のような for 句は、次の例における for 句と同じ性質のものであると述べている。

- (13) a. That book is heavy/expensive for Mary.
 b. The concert lasted too long for Mary.
 c. That dress is too blue for Mary.

上の各例に見られる for は、「～にとって」「～には」の意味の前置詞であり、例えば、(13a) は「あの本はメアリーには重過ぎる／高過ぎる」を意味しており、話し手の主観的な視点からの判断文となっている。(12a) も、話者の主観的な判断文であると考えられ、Bill が動詞句の内容を実際には実行していない解釈も可能であろう。しかし、(12b) に関しては、動詞が過去時制なので、Mary が動詞句の表す行為を実際に行った読みが成立する。ただし for 句を伴う中間構文が常に容認されるわけではない (Ackema & Schoorlemmer 1995 : 180)。

- (14) a. These books don't sell (*for the average shopkeeper).
 b. (on shoe chest) Stows on floor or shelf (*for tidy people).
 しかし、Stroik (1999 : 122) は、for 句を伴う次のような (14) に類似した中間構文の例を挙げている。
 (15) a. These kinds of books just don't sell for any shopkeeper.
 b. (on shoe chest) Stows on floor or shelf for anyone with half a brain.
 (16) a. These books won't sell for the average shopkeeper.
 b. (on shoe chest) Should stow on floor or shelf for you.

(14a) に関しては、for 句に不特定な「売り手」が現れ

なければならないが、「平均的な売り手」という特定のな名詞が現れており、そこに矛盾があり、(14a) が容認出来ない文であると判断されているものと思われる。(14b) に関しても同様の説明が適用出来るように考えられる。あくまでも中間構文では主語名詞の内在的な特性が表現されるわけであるから、内容が肯定的でも否定的でも主語名詞の特性に関する一般論を表す文でなければいけない。つまり (15) 及び (16) の各例は意味的に主語名詞に関する「一般論」と捉えられるのでそれぞれの例が容認できる中間構文と解釈できると考えられる。しかし、いずれにせよ、for 句を伴う中間構文は非典型的な範疇に分類されることになろう。

中間構文では動作主は統語的に現れないのが典型的であるが、Rosta (1996 : 127) は次のように、特定の動作主が現れている例を挙げている。

- (17) a. The car handles smoothly when Sophy drives it.
 b. Odes to herself write easily when she's in a narcissistic mood.

上のように、動作主が when 節に現れている例もあるわけだが、このような例は少数派に属するものであり、大半の中間構文では動作主は表面に現れることはない。それは、中間構文を用いることにより、主語名詞の特徴を浮き彫りにしつつ、その特徴は誰にでも経験されるものであることを表すからである。

(11) で、すでに見たように、by 句を伴う中間構文は、通例は、許されない。しかし、Kawasaki (1999 : 309) は、even が挿入されていたり、あるいは、even を伴う by 句が音調的に述語から切り離された格好になっているような場合にはかろうじて中間構文が成立すると述べ、次の例を挙げている。

- (18) a. ??Bureaucrats bribe easily even by foreign companies.
 b. ?That horrible kind of bureaucrat bribes easily, even by FOREIGN companies.

上のような例はかろうじて容認できる非典型的な中間構文であることに変わりはないであろう。上で見たような for 句あるいは by 句を伴う中間構文のいずれもが、非典型的であり、marginal な部類に入ることだけは確かである。

結論的には、動作主は統語的には現れず、意味的に含意されているのが典型的な中間構文であり、通例は、統語上姿を見せない動作主は話し手自身、あるいは任意の人であると解釈される。

4. 中間構文で許容される動詞、許容されない動詞

周知のように、中間構文には他動詞が現れるが、すべての他動詞が許容されるわけではない。これまでに Affectedness Constraint ((受影性の制約)以後、AC)) が生成文法の立場から支持されてきた。例えば、Jaeggli (1986)、Fellbaum and Zribi-Herz (1989, 以後 F & Z)、Hale and Keyser (1992, 以後 H & K) Hoekstra and Roberts (1993, 以後 H & R) などが AC を支持してきたが、AC を簡略化して述べると、「目的語である対象に影響を与える意味を持つ他動詞が中間構文で許容される」としてよいように思われる。比較的具体的な中間動詞の項に関する一般化の提案は、次のように、F & Z (1989 : 29)に見られる。

- (19) In English (but not in French), the argument of a middle verb must be interpreted as AFFECTED by the action referred to by the verb.

- (20) An argument A (of a verb or predicate) is AFFECTED by the action or process P referred to by the verb if the referent of A exists prior to P and if its inherent properties are modified by P.

直感的に、目的語である対象に「影響を与えない」と考えられる他動詞は、物理的にも心理的にも対象に「働きかける」意味がない。そのような動詞には、see, hear などの感覚動詞、経験者 (Experiencer) の主語を伴う like, adore, forget, recognize, notice などの心理動詞や思考動詞、及び、tell, express, announce などの伝達動詞が含まれることになろう。例えば、以下の各例は AC でうまく処理できるように思われる。

- (21) a. *Weird noises hear most at night.
(H & K 1993 : 201)
b. *The mountains see best after rain. (Ibid.)
c. *The answer learns easily. (K & R 1984 : 383)
d. *The answer knows easily.
(Fagan 1988 : 199)
e. *Fairy tales don't tell (to modern children) easily.
(H & R 1993 : 201)
f. *Such news doesn't announce easily. (Ibid.)

何かを感覚すると言っても、意図的な感覚と非意図的な感覚がある。非意図的な感覚を表す感覚動詞は目的語である対象に影響を与えないので (21a) と (21b) は中間構文では許されないことになる。(21c) と (21d) に関して、動詞の learn や know が目的語の対象に影響を与える読みは許さないで、中間構文においてそれらが許容されないと説明することができるであろう。いずれにせ

よ、これらの動詞も対象に「働きかける」意味合いがない。また (21e) と (21f) に関して、動詞は対象に向かって言葉を発するだけで直接対象に影響を及ぼす意味はないので中間構文には馴染まないと説明することができるであろう。一方、意図的に何かを感覚しようとする意味合いを持つ感覚動詞は、少なくとも、目的語である対象に心理的に「働きかける」ことになるので、そのような場合は、次のように、感覚動詞が中間構文で許されることがある。

- (22) a. The Victory of Samothrace, at the top of a flight of steps, sees more easily than the Mona Lisa, which is always surrounded by a crowd.
(Rosta 1995 : 131)
b. This movie watches easily.
(Goldberg 1995 : 183)

ここで問題にしたいのは、ある動詞が表す内容が意図的行為か非意図的行為かということである。例えば、何かを思い出そうとする行為は意図的行為であるが、何かを覚えていることは、非意図的である。何かを学ぶことも意図的な場合と非意図的な場合があると考えられる。そして、動詞が意図的な内容を表すと解釈出来る場合には、思考動詞であっても中間構文で許される。例えば、know は状態動詞として「～の知識を持っている」という意味では上で見たように、中間構文で許されないが、意図的に「～を知ろうとする」という意味では中間構文で許される。恐らくは、ある動詞に意図性の意味が汲み取れる場合にはそれが中間構文で容認できる理由で O'Grady (1980 : 65) は次の (23b) をかろうじて容認可能と判断しているものと思われる。

- (23) a. Tomorrow never knows. (井筒 2002 : 85)
b. ?These numbers remember/forget/learn easily.

以上のように、「意図性」ということが動詞が中間構文で容認されるかされないかに大きく関わっているように思われる。

ところで、目的語である対象に「影響を与える」読みがほとんど不可能な意味内容を表す動詞が中間構文で許されている例もあり、この場合は AC で処理が出来ない。例えば、

- (24) a. This scientific paper reads like a novel.
(Jespersen 1927 : 351)
b. Mary photographs well. (F & Z 1989 : 28)
c. Bert doesn't interview well.
(Taylor 1996 : 172)

また、例えば、destroy, murder, assassinate などのように目的語である対象に極度の影響を与える意味を持つ動詞であっても、通例、中間構文において許されない。

- (25) a. *Innocent victims murder easily.
(Levin 1993 : 231)
b. *Cities destroy easily. (Ibid : 239)
c. *This cathedral destroys easily.
(Taniguchi 1994 : 191)
d. *Presidents assassinate easily.
(Nakamura 1997 : 136)

従って、上の各例も AC では扱えないことになるのである。ただし、例えば、destroy が常に中間構文から閉め出されるわけではなく、次の各例では許容されている。

- (26) a. [Computer game] The mission is to destroy all the asteroids in each sector. The twist is the asteroids don't destroy easily, ... wrecking havoc on the player.
(影山 : 2004 : 128)

- b. These carefully constructed sets will destroy easily during the crucial earthquake scenes of the movie. (Ibid.)

(25a) は、「都市は破壊しやすい」という内容を表しているが、都市は破壊される為に存在しているわけではない。意味論的には、destroy cities というフレーズは全く問題なく解釈可能な表現である。しかし、(25a) を現実世界の知識に基づいて判断すると、それはまるで破壊の対象として都市が存在している読みを与えることになり、ゆえに、容認されないものと考えられる。同様に、(25b) は「この大聖堂は簡単に破壊することができる特性を持つ」ということが主張されていると解釈出来るが、破壊する為に大聖堂が存在しているという主張は現実世界の知識から判断すると異常であり、語用論的な理由で容認されないものと思われる。ところが、同じ destroy が (26a) と (26b) において問題なく用いられている。これは影山 (2004 : 128) が説明しているように、「主語名詞の特質構造に記載された目的役割が中間構文の成否に重要な役割を果たすことがしばしば見られる」ことがあるからである。つまり、中間構文の主語名詞が何のために存在しているのかが限定できる場合、すなわち、主語名詞の使用目的が明確に理解出来る文脈においては通例は許容されない動詞も問題なく中間構文において許容されるということである。

また (25b) と (25d) は容認出来ない中間構文と判断されているが、同じような意味を持つ kill が許容されている Chickens kill easily. の例が K&R (1984 : 384) に、また、These mosquitoes kill only with a special spray. の例が Kitazume (1996 : 180) に見られる。「対象の生命を奪う」という概念を表す動詞であっても murder や assassinate は中間構文で許されないが、

kill が許されるのは何故であろうか。ここで分かることは動詞だけを考慮に入れるだけでは不十分であり、元来は目的語である主語名詞と動詞の意味的な結びつきも考慮に入れなければならないということである。しかし、例えば、sell のような動詞は「商品」の範疇に入ると判断される名詞であればどんなものでも許されるので、このような場合は、動詞のみを考慮に入ればそれでよいことになる。従って、例えば、X sells well. において、「本」「車」「家」など「商品」として考えられるものはすべて X に入ることになる。また、X reads easily. タイプの場合は、「本」「論文」など主語名詞は「読まれる対象」であれば何でも X に収まることになろう。このように、動詞がその目的語に対する選択制限を行う場合もあるがこのような場合は少なく、大半は「動詞と目的語である主語名詞の意味的整合性」が認められるか否かを考慮しなければならない。中間構文自体は主語名詞の永続的な特性を浮き彫りにすることが目的で使用されると考えられるが、その際、主語名詞の特徴づけに関しては、既に見たように、情報として価値があるものでなければならぬという制約が加わる。例えば、*That ball kicks easily. は容認出来ない中間構文と判断されるが、これは、サッカーボールというものは本来的に「蹴られる」ために作られており、その使用目的はまさにそれを「蹴る」ことにある。サッカーボールの自明の機能・役割について、わざわざ、それを浮き彫りにすることは矛盾であり、有意味な特徴づけとは言えず、余剰的な特徴づけであり、ゆえにそれが容認できない理由と考えられる。しかし、本来の「蹴られる」役割がうまく働かないことを表現するとすれば、それは、「意外性」の表明であり、情報としては価値があるものとなり、ゆえに、例えば、Well, I don't know, this new ball doesn't kick very well. (Lemmans 1998 : 80) は適格な中間構文として容認されるわけである。また、例えば、The wall paints easily. (K&R 1984 : 385) は問題のない中間構文であるが、*The wall hits easily. (L&R 1988 : 284) は容認されない。「壁にペンキを塗る」行為は意味論的にも現実世界の知識から判断しても自然であると判断ができるが、「壁をたたく」行為は、現実世界の知識に基づく判断からすれば、尋常でない行為の範疇に属すると判断される。言い換えると、誰かが何かの理由で X hit the wall. という表現をしても、意味論的には全く問題なく解釈可能であるが、中間構文の形で動詞が単純現在時制の形で使われる場合は、主語名詞の永続的な特性が描写されるわけであるから、「その壁は簡単にたたくことができる特性を持っている」という内容を表明することになる。つまり、意味論的には問題ないのだが、語用

論的に問題があるために *The wall hits easily, は容認されないと考えられるのである。この文を容認可能な文にするためには、特別な文脈を与える必要がある。例えば、「壁をたたく行為が日常的に誰にもおこなわれている」世界の中では、The wall hits easily, も可能な中間構文になることが予想できるということである。以上のように、主語名詞の本来的な特性を考慮しつつ、動詞と主語名詞の意味的な結びつきを検討しなければならないことが分かる。そして、その意味的な結びつきとは、現実世界の知識を背景とした語用論的な意味的な結びつきということになるものと思われる。

ここで kill は中間構文で許されるが、何故 murder と assassinate は許されないのかに関する疑問に立ち戻ってみよう。このことも現実世界に関する知識による判断から説明することができるように思われる。ニワトリは日常的に食品として殺されていることは一般的に認識されており、特別な文脈を与えなくてもその内容は現実世界の知識に基づき一般的陳述と捉えることができる。言い換えると、kill と chickens との結びつきは無標のものであり、ニワトリの一特徴づけとして中間構文の形で Chickens kill easily, が成立しているものと思われる。同様に、蚊は一般的に人から嫌われている虫であり、蚊を殺すことが日常的に行われているので、この知識に基づき、These mosquitoes kill only with a special spray, は容認されているように思われる。一方 (25c) と (25d) においては、「罪のない犠牲者を殺害すること」や「大統領を暗殺すること」を一般化してそのような内容を簡単にできると述べることは語用論的な意味において矛盾があるからだと考えられる。従って、何か特別な文脈なり場面が設定されない限りこれらの動詞は中間構文では許されないことになるだろう。²

さて、次に作成動詞 (創造動詞) について見ることにしよう。この種の動詞には build、draw、knit、write などがあるが、通例、中間構文では許されない。³

- (26) a. *Pictures draw well. (Nakamura 1997:135)
 b. *Wool sweaters knit easily (Ibid.)
 c. *That kind of house builds easily.

(米山 & 古賀 2001 : 176)

- d. *This scientific paper writes easily.

(草山 1999 : 203)

一般に作成動詞が中間構文において許容されないのは、中間構文は、主語名詞の機能・役割の描写、すなわち、主語名詞の特徴づけに用いられるからであり、そうするためには、主語名詞が、既に存在する物でなければ、その特徴づけは不可能であるからだとと思われる。また、例えば (26a) は「誰でも上手に絵を描くことができる」

と一般化した陳述がされていることになるが、ここでも現実世界の知識に基づく判断からすると、明らかに上のような一般化には矛盾である。つまり、絵を描くことが得意な人もいれば、そうでない人も存在するのが現実世界であることを考慮すれば (26a) が矛盾した描写であると判断出来よう。この説明は (26b) にもあてはまるであろう。また (26c) 及び (26d) に関しても、特定の主語名詞に関する特徴づけがされた格好になっているが、主語名詞は build、write の行為の結果初めて存在するのであるから、中間構文を使うこと自体が矛盾なのである。

しかしながら、作成動詞であっても以下のように中間構文で許されている例も存在する。

- (27) a. Odes to herself write easily when she's in a narcissistic mood.(= (17b) (Rosta 1995 : 127)
 b. Certain letters write easily.
 (Egerland 1998 : 35)
 c. Such memos always compose slowly.
 (Stroik 1999 : 128)
 d. I am at a sentence that will not write.
 (Jespersen 1927 : 349)

ここでは、主語名詞と動詞の語用論的な意味関係を考える必要性に加え、中間構文が暗に示す「比較」が働いているのではないかと推測される。(27a) では、「自己に陶酔している時には」を意味する when 節は、「自己に陶酔していない時」と暗に對比されていると考えられる。さらに、主語名詞が複数形であるので、特定の指示物に言及していないこともその容認性に関係があるであろう。(27b)、(27c) においても、主語が非特定の名詞であり、また、certain や such のような形容詞が使われていることから他との「比較」「対比」が暗示されていることが分かる。(27d) については、話し手がなにがしかの文を書いている時にこの文が述べられていることは明白であり、「ここから先は全く筆が進まない状態にある」ことが述べられている。これは、特定の出来事を述べている文であり、典型的な中間構文が表す主語名詞に内在する特性の描写ではないことは明らかであり、非典型的な中間構文の例ということになるだろう。

5. 中間構文で許容される動詞の特徴

典型的に中間構文で許容される他動詞に共通する特徴は、「状態変化」を表す他動詞である。「状態変化」には「形状の変化」「(物の) 表面の変化」「(物への) 装着」などが含まれるが、さらに、物理的な「場所の移動」また、「状態保持」も「同一状態のある時間から別の時間への時間的移動」と捉えることができるので、変化を表

す動詞と同じ扱いができる。「状態保持」とは「ある一定の状態を保つ」ことであり、そのような動詞には keep、govern、wear などがある。以下で、様々な「状態変化」を示す動詞の例を見ることにしよう。

- (28) a. This bread cuts easily. (L & R 1988 : 284)
 b. Ripe oranges peel easily. (Curme 1931 : 440)
 c. A porcelain sink cleans easily.
 (Erades 1950 : 155)
 d. These shirts wash well. (Palmer 1973 : 92)
 e. The trailer pulls easily.
 (van Oosten 1977 : 459)
 f. That pram pushes easily.
 (Dixon 1991 : 329?)
 g. These horses saddle easily.
 (H & K 1992 : 126)
 h. The mule harnesses easily. (Ibid.)
 i. Those clothes wear well. (Dixon 1991 : 329)
 j. That kingdom governs easily from SOCIAL CONTRACT. (Ibid.)
 k. Milk won't keep in hot weather.
 (Bruthiaux 2001 : 25)

以上のように、(28a) の cut と (28b) の peel は「形状の変化」を示す動詞であり、(28c) の clean と (28d) の wash は「(物の表面の) 変化」を表す動詞である。また、(28e) の pull と (28f) の push は「物の」位置変化を表す動詞であり、(28g) の saddle と (28h) の harness はともに「装着」を表す動詞である。さらに、(28i) の wear、(28j) の govern 及び (28k) の keep は「状態維持」を表す動詞である。上のいずれの動詞も動作主である Agent が目的語である被動者 Patient に「働きかけ」をする意味を持つ点が共通点として捉えられる。

上ですでに見たように、動詞が他動詞であれば何でも中間構文で許されるわけではない。B & B (2002 : 33) も指摘しているように、特定の意味を表わさず幅広い意味を表す動詞は中間構文では許容されない。

- (29) a. *This car uses well.
 b. This car handles well.
 c. *Your new hair dryer puts away neatly.
 d. Your new hair dryer stores away neatly.
 e. ??I injure easily.
 f. I bruise easily.

(29a) の use は handle の上位語であり、handle ほど具体的ではないために中間構文に馴染まないものと考えられる。(29c) の put away も store away と比べると store away の方が意味的に限定され具体的である。い

わば、put away が store away の上位語のような働きをしていると言えよう。それ故に (29c) は不適格な中間構文とは判断されるが (29d) は適格であると判断されていると考えられる。(29e) の injure も同様に bruise の上位語であると考えられ、bruise よりは具体性を欠く為に容認度が低いものと思われる。⁴ 同じように、*These books put away easily. は許容されないが、動詞がより具体的な shelf が使われている These books shelf easily. (H & K 1992 : 127) は適格な中間構文である。このような事実から、次のように eat が許容されないことも同様の理由で処理出来るように思われる。動詞 eat の定義は、OXFORD 現代英英辞典によると、to put food in your mouth, chew it and swallow it とある。つまり、食べ物を口の中に入れ、噛み、飲み込む一連の行為が「食べる」ことであり、chew、と swallow の両方の行為を含んでいるわけである。このことから、eat は chew や swallow の上位語であると考えられ、それよりも下位語であるそれらは許される。

- (30) a. This meat {chews/digests/swallows} easily
 (F & Z 1989 : 28)

- b. *This meat eats easily. (Ibid.)

また、上の (30b) が容認されない理由は、「肉」は食べ物であることは自明の事実であり、その食べ物である「肉」について、「食べやすい」と特徴づけてみたところで、情報価値のある特徴づけにはならないからである。しかし、肉にもさまざまな種類の肉が存在し、「噛みやすい肉」「飲み込みやすい肉」が存在し、なにがしかの肉をそのように特徴づけることは情報価値ある内容を伝達することになり、それゆえ (30a) は問題のない中間構文となっている。中間構文の特徴は主語名詞の内在的な特性を浮き彫りにすることにあることを考えると、ある食べ物が食べ物と認識される限り、単に「簡単に食べられる」と述べてもそれは有意な情報伝達にはならないが、「比較」がされている場面において eat が許容されることがある。

- (31) A : What shall I have for lunch, an apple or grapefruit?

- B : Since you only have five minutes, take an apple. It eats more rapidly than a grapefruit. (van Oosten 1977 : 463)

- (32) a. These vegetables eat quite well at this time.
 (Rapoport 1993 : 183)

- b. This meat will eat well. (Ibid.)

(31) では、リンゴとグレープフルーツとの比較があり、リンゴの方が速く食べることができると述べることは情

報的に価値があると言え、ゆえに、中間構文の中でeatが使用可能となっている。(32a) が容認されているのは主語名詞の特徴づけがなされている解釈が可能であるからである。つまり、at this time が存在すること、また、主語が限定的であることから、別の野菜との「比較」「対比」が表現されているからである。また (32b) では話し手の主観的判断を表す will が (32b) の容認性を高めている理由であると考えられる。さらに、eat は意味的に taste に近い使われ方がされている例もあり、この場合は「(食べると) ~の味がする」のような意味で eat が使われている。

- ③ a. The cake eats short and crisp.
(Poutsma 1927 : 66)
- b. They'll (the rabbits) eat much better smothered with onions. (Ibid.)
- c. The soup that eats like a meal.
(Massam 1992 : 117)

また eat と同様に、drink に関しても、次の (34a) のように、「飲める」の意味と次の (34b) のように「(飲むと) ~の味がする」の両方の用法があると考えられる。

- ④ a. This wine drinks beautifully.
(Rapoport 1993 : 183)
- b. This wine drinks like water.
(Schlesinger 1995 : 38)

これまでの観察から、動詞に関する制約については、意図的行為者である Agent をその外項に持ち、対象である Patient に働きかけ、対象に「状態変化」をもたらす意味を持つ他動詞が典型的に中間構文で許容されることが分かる。また、思考動詞や感覚動詞であっても意図的に対象に対して精神活動を行うことを意味する思考動詞、また意図的に対象を認識する意味を持つ感覚動詞は、いずれも物理的ではないが心理的に対象に働きかける意味を持つので中間構文で許容されるように思われる。しかしながら、実際、典型的な中間構文においては動詞は他動詞が現れるが、次のように、自動詞が現れている例も存在する。

- ⑤ a. This stage doesn't dance very well—The station platform dances better.
(Yoshimura & Taylor 2004 : 313)
- b. The Strathgery track is racing consistently nowadays. (Heyvaert 2003 : 129)
- c. [about a tennis court] It is slightly coarser, so it plays a bit slower. (Ibid.)
- d. "They rolled the green just before the march and it ran three seconds faster." said Curtis... (Ibid.)

- e. This bed hides under easily.

(Rosta 1993 : 129)

これらの自動詞は、通常は、X dances on a stage、X runs on a track、X plays on a court、X runs on a green、X hides under a bed のように具現化されるものである。(35a) から (35e)までの例は中間構文としては周辺的な存在であるが、中間構文の範疇に属するものと考えられる。また、次のように、主語名詞が被動者ではなく場所や道具を表す名詞が主語になっている例も存在する。

- ⑥ a. The house entered easily, once the barricades were removed. (Rosta 1995 : 129-30)
- b. The river fords easily. (Ibid.)
- c. This lake fishes well. (吉村 1995 : 255)
- d. That knife cuts well. (Dixon 1991 : 329)
- e. The brush paints well. (Heyvaert 2003 : 130)
- f. This violin plays easily.

これらの例も典型的な中間構文ではなく少数派であり非典型的な中間構文の類いではあるが、周辺的な中間構文の範疇に属すると考えられる。以上のように、典型的な中間構文を核として非典型的な中間構文が広がっていることが分かる。実際、一口に中間構文と言っても様ではなく、例えば、Heyvaert (2003 : 13)は幾つかのタイプに分類している。⁵ しかしながら、全てのタイプの中間構文に共通して言える事は、「主語名詞の特徴づけ」がなされているということのように思われる。また、この主語の特徴づけは有意味なものでなくてはならないということである。この点は、すべての中間構文に共通することであるように思われる。いずれにせよ、中間構文の成立に関しては、動詞だけを考慮に入れるだけでは不十分であり、主語名詞と動詞の結びつきを考慮に入れて検討する必要がある。次節で、さらに具体的に主語名詞と動詞の結びつきについて検討することにする。

6. 主語名詞と動詞

4節で触れたように、中間構文の主語名詞と動詞の意味的な結びつきが中間構文成立に大きく関わっているように思われる。例えば、「自動車」という名詞の役割、機能を考えると、それは人や物を運ぶ役割を持っている。また速いスピードで人や物を運搬出来る機能を備えている物として一般的に捉えられていると考えられる。そして、その役割あるいは機能の特徴づける動詞が名詞「自動車」と結合すると、中間構文が成立する条件が揃ったことになる。もちろん、「自動車」と結合することができる動詞は様々であるが、特に重要と思われることは、

その一般的な機能、役割を描写する動詞が中間構文の中で許されるということである。例えば、中間構文では *This car drives easily.* や *That car handles smoothly.* のように「運転する」や「操縦する」を意味する動詞が典型的に許される。もちろん、中間構文では主語名詞の一般的な特性が浮き彫りにされるので、主語名詞がある動詞と結びつき、その結びつきが一般的であるとは捉えにくい場合は、中間構文は成立しないとしてよいように思われる。例えば、恐らく何か特別な文脈や場面が与えられない限り、**This car breaks easily.* のような文は容認されないであろう。なぜなら、車は「壊す」ために存在しているとは一般的に解釈することが難しいからである。従って、この文の動詞は非対格動詞としての読みが無標であることになるであろう。しかし、時として自動車が汚れるとそれを「洗う」という行為が為されることは現実の世界の知識に照らし合わせてみて普通の事態なので、*This car washes easily.* は問題なく中間構文として容認されるものと思われる。このように、主語名詞とそれに後続する動詞との結びつきに意味的な整合性が認められる場合に中間構文が成立するものと考えられる。中間構文における典型的な主語名詞は「人工物」である。「人工物」は使われる目的、用途が定まっており、個々の人工物には目的役割があり、従って、中間構文では主語名詞として「人工物」が圧倒的に多いことは不思議なことではないであろう。中間構文が「宣伝」「広告」で多く見られる理由は、この構文を使うことによって、主語名詞の優れた特徴を前景化することが出来るからに他ならない。商品としての人工物はその機能が優れていればいほど売れ行きがよくなるわけであるから、その機能の優れていることを謳うにはまさに中間構文がうってつけなのである。要するに、ある名詞について考える際、その名詞は何の為に存在しているのか、ということを考えることが鍵になるように思われる。中間構文に現れる主語名詞は広義には「道具」として捉えて差し支えないように思われる。何かをするために何がしかの道具を使用することは日常的に行われていることであり、道具の使い勝手が良ければ、*easily*、*smoothly*、*well* などの副詞とともに良い評価が主語名詞に下されている中間構文が成立することになる。ある道具を「使用する」ことはその道具に「働きかける」ことであり、この「働きかけ」が無ければ、いかに優れた特性を備えていてもその道具はその機能を発動させることはないのであるが、まるで「働きかける」主体である Agent 抜きで Patient である道具名詞がその機能を発動させているかのような印象を強く打ち出す機能を中間構文は持っているわけである。まさにここに中間構文が使用される「動機づけ」

があると言えるであろう。すでに上で見たように、「主語名詞と動詞の意味的整合性」が認められる場合に中間構文が成立するので、そのような整合性が認められない次の Ackema & Schoorlemmer (1994 : 78) が挙げている例は容認されない。

(37) a. *Mountains climb easily for experienced mountaineers.

b. *Little village pass easily.

(37a) は、主語名詞 *mountains* の「登り易さ」を一般化している文となっているが、実際、「自然物」の山に関して、このような特徴づけには無理があろう。「自然物」である「山」にはそれに本来的に目的役割は備わっていないと考えられる。従って (37a) は容認不可能と判断されているものと思われる。現実世界に関する一般的な認識として、主語名詞に何かの目的役割が認められ、且つ、その目的を遂行する意味の動詞が組み合わせられて初めて中間構文は成立するものと思われる。(37b) に関しても、同様に、主語名詞 *little villages* を特徴づける一般化が中間構文の形で許されないのは、主語名詞が特定の目的役割を持っていると解釈することが困難であるからであろう。つまり、中間構文では、ある主語名詞に対して、それに何がしかの目的役割を持つ解釈ができない場合、その名詞は主語になることができないのである。しかし、次の (38a)、(38b) では同じ動詞の *climb* と *pass* が使われているが、適切な場面が与えられているため、主語名詞と動詞の結びつきに整合性が認められ、それらは容認可能な中間構文となっている (Ackema & Schoorlemmer 1994 : 79)。

(38) a. (prison architect) This wall looks as if it would climb too easily. Better put some barbed wire on top.

b. (codriver to driver) That next truck won't pass easily—it's pretty long and traveling very fast.

(38a) では主語名詞の「壁」は囚人達が刑務所から脱走することを阻止する道具として捉えられており、ゆえに「壁」には目的役割があることになり、動詞 *climb* と自然な結びつきが認められるので、(38a) は容認可能な中間構文と判断されている。(38b) に関しても、同様に、主語名詞が追い抜く目標物となっているので、動詞 *pass* と自然な結びつきが認められ、ゆえに (38b) は適格な中間構文と判断されているのである。「自然物」であっても時として、何かを行う為の「手段」と捉えられるような場合には、「道具」の一種として解釈できるため、例えば、*The river fords easily.* (Rosta 1995 : 130) と *This lake fishes well.* (吉村 1995 : 255) において、

それぞれの主語名詞「川」と「湖」は自然物ではあるが、「川」を一方の岸から他方の岸へ渡る「手段」として、また「湖」を釣りをするための「手段」として捉えることが可能であるため、これらの中間構文は容認されているものと考えられる。さらに、This bed hides under easily. (Rosta 1995: 129) が容認されているのは、例えば、恐ろしい強盗が侵入してきた場合や地震が起った場合などには「たやすく隠れることができる場所」として this bed を特徴づけることが出来るからであると思われる。

上で述べたように、中間構文に現れる主語名詞は大半が「人工物」であり、あらかじめその機能あるいは使用目的は設定されており、「道具」と考えてよいように思われる。「道具」には「材料」「手段」の意味も含まれるので、例えば、This flour cooks well. (Dixon 1991: 330) も問題なく容認される。

以上、中間構文の成立の制約に関しては、動詞だけを考慮に入れるだけでは不十分で、主語名詞と動詞の意味的整合性を検討することが必要であることを見た。

7. 中間動詞と非対格動詞

中間動詞と非対格動詞がそれぞれ独立して存在しているというよりも一つの動詞に関して解釈が ambiguous であるという風に考えた方がよいように思われる。つまり、解釈の仕方によってある動詞が中間動詞と解釈されたり非対格動詞と解釈されたりするということであり、結局は、文脈や場面といった要素がいずれかの解釈を決定するということになると考えられる。例えば、This vase breaks easily. について考えてみよう。この文は現実的には非対格動詞が含まれている文として解釈するのが普通であると思われる。なぜなら、中間構文として「この花瓶は簡単に壊せる。」という解釈をすると不自然な感じがするが、非対格動詞を含む文として「この花瓶は壊れやすい。」という解釈には不自然さは感じられないであろう。この文の動詞を中間動詞としてあるいは非対格動詞として解釈することが可能であるが、後者の動詞としての読みが普通であると感じられるのは、現実世界の知識、一般的な世界に関する認識として、故意に花瓶を壊す行為は普通の行為と捉えにくいことによるものと考えられる。従って、何か特殊な文脈を想定しない限り This vase breaks easily. の break は非対格動詞として解釈することが norm であるということになる。また、動詞が非対格動詞として解釈され場合は、This vase breaks easily all by itself. のように all by itself を入れることが出来るが、中間動詞の読みの場合は不適

格な文となる。従って、中間構文としての *This vase breaks easily all by itself. は容認不可能という判断が下されることになる。中間動詞と非対格動詞の決定的な違いは、前者に関しては Agent の存在が前提となっているが、後者に関しては Agent が不在であるところである。また、次の Palmer (1974: 92) が挙げている The door doesn't open in wet weather. についても二通りの読みが可能である。つまり、open を非対格動詞として解釈すると、この文は「そのドアは雨天の時には開かない。」を意味するが、open を中間動詞として解釈すると、「そのドアは雨天の時には開けることができない。」を意味する。結局、すでに上で述べたように、どちらの読みが選ばれるかは文脈、場面次第ということになるだろう。

8. おわりに

これまで見てきたように、中間構文はその成立に関する制約が厳しい有標の構文である。この構文は、主語名詞とその同類の他者との比較を暗に表しているように思われる。例えば、This book sells well. は、「この本は(他の本に比べて)よく売れる」というような比較を含意している文として捉えられるということである。また、例えば、*Boys teach easily. は容認されないが Boys teach easily, but girls don't. (吉村 1995: 295) のように「比較」が明示されている文も容認可能となる。類例を重ねると、*John trusts easily. は容認されないが、Honest men trust easier than thieves. (O'Grady 1980: 66) は容認可能な中間構文である。このように、暗にあるいは明示的にある主語名詞が同種あるいは同類の他の名詞との「比較」を表すのに中間構文が使われており、それが中間構文の存在理由の一つと考えられる。主語名詞と他者との「比較」ということも結局は主語名詞の「特徴づけ」ということに他ならないであろう。

This knife cuts well. タイプの主語名詞が「道具」である文は擬似中間構文と呼ばれているが、実際、典型的な中間構文における主語名詞も広義の「道具」と呼んでも差し障りがないように思われる。さらに上で見たように、This lake fishes well. タイプでは主語名詞が「場所」であるが、これも広義には「道具」と捉えることも可能であろう。いずれにせよ、典型的な中間構文には主語名詞を特徴づける機能があり、話し手が主語名詞を「良い」あるいは「悪い」のいずれかの判断を下している文であるということである。この構文が広告や宣伝で多用されることが多いが、それはこの構文が主語名詞に内在する特性(この場合は良い特性)を浮き彫りにする

機能を持っているからに他ならない。また、この構文を用いることによって、動作主体はほとんど全く「努力」なしで被動者である主語名詞を簡単に操作あるいは使用できることを言い表すことができるので、主語名詞が「商品」である場合は、この構文が最も適切であることになる。

注

- ¹ 次のように中間構文が質問の答えとなっているような場面においても副詞語句は必要とされない。
 - (i) (How do you close this purse?)
It snaps/It zips/It buttons. (Goldberg & Ackerman 2001 : 806)
 - (ii) (Where do we enter the secret passageway?)
The bookshelf opens. (Ibid.)
- ² Lemmens(1998 : 81)は Unarmed people {murder/assassinate/massacre / execute} easily. を挙げ、この文に関する最も prominent な読みはこの文を目的語のない他動詞構文と読むことであると述べているが、この文を中間構文として読む可能性が全く排除されるわけではないという。恐らく、主語名詞が unarmed people であるためにこの文を中間構文として解釈する可能性が残されているものと思われる。なぜなら、主語名詞とそれに後続する動詞との間に意味的整合性が見いだしやすくなっているからである。
- ³ 米山 & 加賀 (2001 : 176) は "That kind of house builds easily. は非文法的であるが、That kind of house constructs easily. は文法的な中間構文であると述べている。しかし、筆者のインフォーマント調査では、construct を含むこの例文も容認できないという結果を得た。従って、上の米山 & 加賀 (2001 : 176) が挙げている construct を含む例に関しては議論の余地が残っている。
- ⁴ しかし、影山 (2004 : 122) は injure を含む次のような例を挙げている : He has a very thin build, and is extremely fair-boned. Thus, he injures easily.
- ⁵ Heyvaert (2003 : 134-7) は easily や with difficulty を伴う中間構文を facility-oriented middles と呼んでいるが、これに並んで、quality-oriented middles、feasibility-oriented middles、destiny-oriented middles、そして result-oriented middles に分類している。詳細は Heyvaert (2003 : 134-7) を参照のこと。

参考文献

- Ackema, P. and M. Schoorlemmer. 1995. "Middles and Nonmovement." *Linguistic Inquiry* 26., 73-197.
- Bassac, C. and P. Bouillon. 2002. "Middle Transitive Alternations in English: A Generative Lexicon approach." In P. Boucher ed., *Many Morphologies*, 29-47 Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Bruthiaux, P. 2001. "Missing in Action: Verbal Metaphor for Information Technology." *English Today* 67, 24-30.
- Curme, G.O. 1931. *Syntax*. Boston: Heath.
- Dixon, R.M.W. 1991. *A New Approach to English Grammar*,

- on Semantic Principles*. Oxford: Clarendon Press.
- Egerland, D.1998. "Affectedness Constraint and AspP." *Linguistica Studia* 52(1), 19-47.
- Erades, P. 1950. "Points of Modern English XII," *English Studies* 31, 153-157.
- Fagan, S. 1988. "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 81-203.
- Fellbaum, C.1985. "Adverbs in Agentless Actives and Passives." *Chicago Linmguistic Society* 21, 21-31.
- Fellbaum., C. and A. Zribi-Hertz. 1989. *The Middle Construction in French and English: A Comparative Study of its Syntax and Semantics*. Indiana: Indiana University Linguistics Club. Publications.
- Goldberg, A.E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Goldberg, A.E. and F. Ackerman. 2001. "The Pragmatics of Obligatory Adjuncts." *Language*. Volume 77. Number 4, 798-814.
- Halle, K and J. Keyser. "The syntactic character of thematic structure." In I. M. Roca ed., *Thematic Structure: Its Role in Grammar*, 107-143. Dordrecht: Foris Publications.
- Heyvaert, L. 2003. *A Cognitive-Functional Approach to Nominalization in English*. Berlin • Newyork: :Mouton de Gruyter..
- Hoekstra, T and I. Roberts. 1993. "Middle Constructions In Dutch and English." In Reurand; E. and W. A. Braham eds., *Knowledge and Language*. Volume II, 183-220. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Huddleston, R.D. 1971. *The Sentence in Written English*. Cambridge University Press.
- Iwata, S. 1999. "On the Statue of an Implicit Arguments in Middles." *Journal of Linguistics* 35, 527-553.
- 井岡勝信. 2002. 『場所と力-意味に基づく英文法序説-』東京 : 現代工社
- Jaeggli, O.A. 1986. "Passive." *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.
- Jespersen, O. 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles: Part III. Syntax*. Second Volume. Allen & Unwin.
- 影山太郎. 2004. 「中間構文における語彙概念構造と特質構造の相互作用」 関西学院大学『英米文学』第四十八巻 第一・二号 117-133.
- Kawasaki, N. 1999. "What is Special about the Agent in the Middle?" In Muraki, M and E. Iwamoto eds., *Linguistics: In Search of the Human Mind*, 307-328. Tokyo: Kaitakusha.
- Keyser, S.J. and T. Roeper. 1984. "On the Middle and Ergative Constructions in English." *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Kitazume, S. 1996. "Middles in English." *Word* 47, Number 2, 161-183.
- 草山 学 1999. 「主語と既存性と中間構文」『英語語法文法研究』第6号, 199-213. 英語語法文法学会
- Lakoff, G. 1977. "Linguistic Gestalts." *Chicago Linguistic Society* 13, 236-87.
- Langacker, R.W. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar*.

Vol. 2 Stanford University Press.

- Lemmens, M. 1998. *Lexical Perspectives on Transitivity and Ergativity*. Amsterdam.: John Benjamins.
- Levin, B. 1993. *English Verb Classes and Alteration: A Preliminary Investigation*. Chicago and London.: The University of Chicago Press.
- Levin, B and T. Rapoport. 1988. "Lexical Subordination." *Chicago Linguistic Society* 24, 275-289.
- Massam, D. 1992. "Null Objects and Non-Thematic Subjects." *Journal of Linguistics* 28, 115-137.
- Nakamura, M. 1997. "The Middle Construction and Sentence Passivization." In Kageyama, T. ed., *Verb Semantics and Syntactic Structure*, 115-147 Tokyo: Kuroshio Publications.
- O'Grady, W. D. 1980. "The Derived Intransitive Construction." *Lingua* 52, 57- 72.
- Oosten, J. van. 1977. "Subjects and Agenthood in English." *Chicago Linguistic Society* 13, 459-471.
- Oxford Advanced Lerner's Dictionary. 2000, 6th edition. Oxford University Press. [OALD6]
- Palmer, F.R. *The English Verb*. London: Longman.
- Poutsuma, H. 1926. *A Gramnmar of Late Modern English: Part II*. Groningen: Noordhoff.
- Rapoport, T. R. 1993. "Verbs in Depictives and Resultatives." In J. Pustejovsky. ed., *Semantics and the Lexicon*, 163-84. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Rosta, A. 1995. "How Does This Sentence Interpret ? : The Semantics of English Mediopassives." In Aarts, B. and C.F. Meyer eds., *The Verb in Contemporary English: Theory and Description*, 23-44. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schlesinger, I.M. 1995. *Cognitive Space and Linguistic Case*. Cambridge Universty Press.
- Stroik, T.S. 1999. "Middles and Reflexivity." *Linguistic Inquiry* 30, 165-171.
- Taniguchi, K. 1994. "A Cognitive Approach to the English Middle Construction." *English Linguistics* 11, 173-196.
- Taylor, J.R. 1996. *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 吉村公宏. 1995. 『認知意味論の方法』京都: 人文書院
- Yoshimura, K and J.R. Taylor 2004. "What makes a good middle? The role of qualia in the interpretation and acceptability of middle expressions in English." *English Language and Linguistics* 8.2, 293-321.
- 米山三明・加賀信広. 2001. 『語の意味と意味役割』東京: 研究社
- Zribi-Hertz, A. 1993. "On Stroik's Analysis of English Middle Constructions." *Linguistic Inquiry* 24, 583-589.

(平成17年10月3日受付)